

令和6年度 岡崎市教育研究大会レポート

1 13生活指導

岡崎市立梅園小学校 成田 隆二

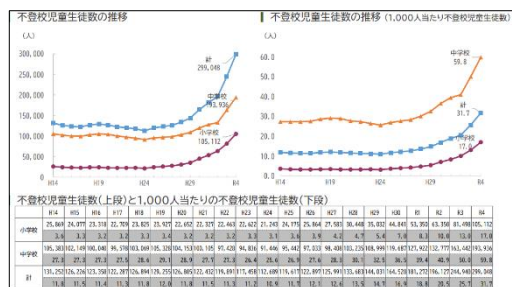
2 研究テーマ

自らの望む形での学校生活と望ましい人間関係の確立を目指して
～校内教育支援センター「かえで」の利用を通して～

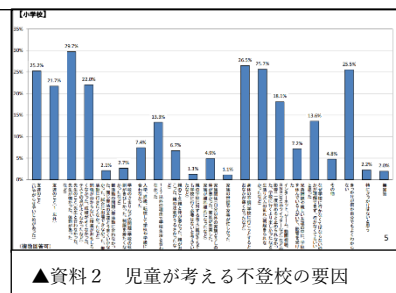
3 研究概要

(1) 主題設定の理由

昨年10月に文部科学省より、令和4年度の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果が公表された。この資料を見てみると、不登校が理由の長期欠席の児童生徒が増えていることは顕著である【資料1】。特に平成30年度から急激に増え続けており、ついに令和4年度には、小学生でも10万人をこえる児童が不登校となった。また、1000人当たりの不登校児童数を見ても、平成30年度からは、毎年1人以上増えており、令和2年から3年にかけては3人。令和3年から4年にかけては4人も増えている。平成30年度から令和4年度にかけては、1000人あたりで10人も増えており、上昇率を見ても顕著であることが分かる。岡崎市内の学校の状況を見聞きしても長期欠席児童生徒数は、5・6年ほど前から間違いなく増えている。



▲資料1 小・中における不登校の状況について



▲資料2 児童が考える不登校の要因

不登校になる原因は、多岐に渡るだろう。問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果を見ると、教師の考える不登校の要因として1・2番目に挙げられているのは、「無気力、不安」「生活リズムの乱れ、遊び、非行」の本人に係る状況である。次いで、学校に係る状況である「いじめを除く友人関係をめぐる問題」、家庭に係る状況である「親子の関わり方」と続いている。特に「無気力、不安」の項目を見ると、小中学生共に、不登校児童生徒数全体の半数を超える原因となっている。一方で文科省が示す令和2年度不登校児童生徒の実態調査の結果【資料2】では、児童が考える不登校の要因には、先生のことが3割近く占めており、教師と児童の捉え方の違いがある。

このような状況に対して、岡崎市内の中学校では、2020年から段階的に校内フリースクール「F組」が立ち上げられた。また、本年度からは夜間学級の「S組」の取組が始まった。F組が導入されてからというもの、岡崎市内の長期欠席生徒数の上昇率が確実に抑えられていると聞く。昨年度まで勤務していた中学校でF組に通っている生徒を見てみると、自分でやりたいことを考え、取り組むことができ、生き生きとした表情になり、登校できる生徒が増えたように思う。F組を開設することで、多種多様な生徒たちに対して個別の対応をすることができる。そうしたことが長期欠席生徒の増加を抑えているのではないかと考えられる。今後、小学校にもF組に似たような学級が導入されれば、同じように救われる児童がいるのではないかと考えた。

本校にも昨年度から校内教育支援センター「かえで」という学級が存在している。(以下、「かえで教室」) このかえで教室は、F組のような立ち位置というよりも、適応指導教室という側面が強く残っていた。つまり、長期欠席傾向の児童を在籍学級に復帰させることを目指していた。しかし、在籍学級への復帰を目指すよりも社会的な自立を目指していくF組のような立ち位置に変えていった方が、一人一人の実態に応じて、子供たち自身の望む形での学校生活を送られるのではないかと考えた。

子供たち自身の望む形での学校生活を送られるようになれば、自分の思いを伝えることができ、望ましい人間関係をつくることのできるのではないかと考えた。

このような考えから、本研究の主題を上記のように設定した。

(2) 目指す子供

以上のことを踏まえて目指す子供像を以下のように設定した。

- ・一人一人の思いに寄り添って支援することで、学校に居場所を作り、登校することができる子供

(3) 研究の仮説

仮説

- ・在籍学級以外にも居場所づくりをすることで、登校へのハードルを下げ、学校に来ることができ、望む形での学校生活を送ることができるだろう。
- ・生徒指導上の4つの視点をもとに、校内教育支援センターの運営を子供一人一人に合った支援を行う形にすることで、社会的な自立に向けた人間関係の構築ができるだろう。

(4) 生徒指導上の4つの視点を意識した手立て

【自己存在感の感受】【A】

厳格なルールを定めないことで一人一人の状況に対して個々にあった支援をすることとした。一人一人の思いを大切にすることにより、「自分も一人の人間として大切にされている」という自己存在感を感じることができるだろうと考えた。

【共感的な人間関係の育成】【B】

カードゲームやボードゲームを設置することでかえで教室の利用者同士の交流を深められるようにした。どのゲームも一人で取り組むことができないものなので、利用者同士での交流や担任の先生等と交流をして、人間関係を構築することができる考えた。また、かえで教室には、校務主任を軸としながら、通級担当の教師や非常勤の教師が交代で常駐し、いつでも迎えられるようになっている。教師も代わる代わるではなく、ある程度固定することで、人間関係を構築しやすいだろうと考えた。



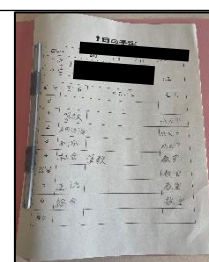
▲資料3 かえで教室にあるゲーム類

【自己決定の場の提供】【C】

かえで教室に登校したら、最初に自らの予定を作る。そうすることで、1日の過ごし方を決定することができる。在籍学級へ行く時間や、かえで教室で学習する時間。時には、かえで教室で息抜きをする時間を決めて、見通しをもって取り組むことができるようにする。日課の枠組は在籍学級と同じようにして、学校生活と変わりなく動けるようにした。また、自己決定をすることが苦手な児童もいることから、各学級の週予定を教室に掲示することで参考にして、予定を立てられるようにした。そういった取組によって、社会的な自立へとつながっていくだろうと考えた。



▲資料4 週予定の掲示
▼資料5 それぞれの作る1日の予定



【安全・安心な風土の醸成】【D】

いつでも、どんな時でも使用できることを第一として、かえで教室を運営するようにした。かえで教室への利用登録などの手続きはなく、1時間だけの利用や給食の時間だけの利用なども含めて使いたいと思ったときにいつでも利用できるようにした。いつでもかえで教室が利用できる安心感や行きたいと思った授業にいつでもいけることができるようにしていくことで、かえで教室に対して安心感をもって関われるであろうと考えた。

4 実際の状況と成果

長期欠席傾向のある児童は、本校にも何人かいる。その中でも、1学期末にかえで教室を継続的に利用している児童は10名程度いた。その子たちを中心に、かえで教室を利用した児童の状況や成果についてそれぞれまとめた。

- ① 家族構成
- ② 昨年度から年度初めの様子
- ③ 【A】～【D】のどの手立てを軸として講じたか
- ④ 現在の様子や成果
- ⑤ 保護者の思い

【事例1】在籍学級での活動をベースにかえで教室を利用している6年生児童 A

- ① 父親 母親 兄(中1) 本人 妹(就学前)
- ② 昨年度から引き続き、かえで教室を利用している。多くの時間を在籍学級で過ごすことが出来ている。1年生との交流に楽しさを感じている。かえで教室の利用は1日1時間程度を目安に使用していると考えている。
- ③ 【C】を軸に支援を行った。朝が苦手という部分があるので、自分自身でどのように過ごしていくかを考えて日程を自己決定できるようにした。
- ④ 4月は、ほぼ在籍学級で過ごすことができ、1時間の利用もない日があった。5月以降は、1・2時間目をかえで教室で過ごしてから、3時間目から在籍学級に入っていくことが多い。自分で日程を決めることで在籍学級での授業時には意欲的に取り組むことができた。その他にも、1年生とのペア交流や職員室掃除の際には普段関わることのない先生たちと話すことができ、生き生きとした姿が見られ、本人にとってもよいリズムが作られているように思う。
- ⑤ かえで教室の利用を1時間に抑えてほしいと考えているものの、兄がF組を利用しながら、欠席することが多い現状からも、このまま毎日登校できるようにして欲しいと思っている。

【事例2】在籍学級での活動をベースにかえで教室を利用している4年生児童 B

- ① 父親 母親 本人 妹(小1) 弟(年中) 妹(就学前)
- ② 昨年度から引き続き、かえで教室を利用している。在籍学級での生活を軸にしながら、状況に応じて、かえで教室を利用したいと考えている。
- ③ 【D】を軸に支援を行った。苦しい状況があるときに、休める場所があると本人にとって過ごしやすさがあるので、いつでもかえで教室を利用できる安心感を高められるようにした。
- ④ ほとんどの時間を在籍学級で過ごすことができている。家庭では、1年生の妹が欠席すると、自分も休みたいと言っているような状況がある。学校へ登校してしまえば、かえで教室ではなく、在籍学級に行くことができる。苦しい時には、本人から学級担任やかえで担当の教師に申し出て、週に2～3時間程度、かえで教室を利用しており、いつでも利用できる場所となっていそう。
- ⑤ 下の子に手がかかってしまい、本人を見られていない現状もある。このまま学校に通えればよいと考えている。学習が遅れている部分があっても楽しくやってくれればよいと考えている。

【事例3】朝、登校時にかえで教室を利用することで在籍学級へと入れる5年生児童 C

- ① 父親 母親 本人 妹(年中)
- ② 昨年度は多くの時間をかえで教室で過ごしていた。在籍学級での生活に対して、楽しさを感じているものの、たまに気分が沈んでしまうことがあり、かえで教室を希望し、本年度も継続して利用している。
- ③ 【D】を軸に支援を行った。朝が苦手な遅刻してくることが多く、登校後、かえで教室に行くことが多い。そのため、かえで教室を利用しやすい状況を作れるようにした。

- ④ 在籍学級へ入ることを渋る理由が、本人の話からも明確に見えてこない。朝以外にも、テストなどの受けたくないものがあるときに、かえで教室に行ってしまうことがある。しかし、かえで教室にいても担任が迎えに行くと、そのまま一緒に在籍学級に行けることが多く、何か、きっかけを待っているような様子もあるのかもしれない。ただ、かえで教室でも、在籍学級でも自分の思いを伝えられる場面が増えており、安心感が高まっているように思う。
- ⑤ かえで教室に行かずに登校できるならその方がよいが、かえで教室に行ってはいけないと決めて学校に行けなくなるくらいなら、今のままでもいから学校に登校してほしいと考えている。

【事例4】不安定になるとかえで教室の存在が助けになっている4年生児童 D

- ① 母親 兄（中1） 本人
- ② 昨年度から引き続き、かえで教室を利用している。今年のスタートも特に昨年度と変わらずやっていけばよいと本人は考えている。
- ③ 【C】を軸に支援を行った。在籍学級に行く時間は日にもよるが、多い時では、5時間過ごす日もあれば、1時間も来られない日があって、本人の調子や気分が大きく左右されている。よって、本人の自己決定を尊重できるようにした。
- ④ 4月のはじめから多くの時間をかえで教室で過ごしていた。しかし、7月上旬の懇談会の前に本人が保護者に話をして夏休みまで、かえで教室を利用しないという決めた。懇談会後は、かえで教室を利用せずに1学期を終えた。自分で決めたことを守ることができた。ただし、かえで教室を利用しない代わりに1日1時間程度、保健室に行くようになった。
- ⑤ 人間関係の固定が4年生ごろから強くなると考えているようで、在籍学級で人間関係を作ってほしい思いから、在籍学級で過ごしてほしいと思っている。そういった考えから、かえで教室に行くことにどちらかというとな否定的であり、利用してほしくないと考えている。

【事例5】かえで教室があることで登校を続けられている5年生児童 E

- ① 父親 母親 本人 弟（小3）
- ② 昨年度も登校を渋ることはあったが、本格的に休むことはなかった。今年は、登校しぶりから長期欠席傾向に流れていくような状況があり、今年度途中からかえで教室を利用している。
- ③ 【B】を軸に支援を行った。明確な理由はわからないが、ゴールデンウィーク明けから登校を渋るようになった。学級にも友達がいる、そこに不満はないというが、何となく、教室にいることが苦しいと思っている。なので、自分の思いに寄り添ってくれる人間関係の構築をできるようにした。
- ④ ゴールデンウィーク明けは運動会の練習もあり、在籍学級に入りながらかえで教室を利用した。かえで教室で人間関係が構築できると、かえで教室で過ごす時間が増え、在籍学級で過ごす時間が減っていった。終業式前日の学年でのレクリエーションや終業式の日には、登校して在籍学級に参加する予定だったが、かえで教室で過ごした。5月以降、週1回程度休んでいたが、かえで教室に慣れてきたこともあってか、7月の欠席は、1日のみであった。
- ⑤ 明確な理由が分からないから対応に困っている現状がある。現在、学校に行くことを第一として考えている。在籍学級に行くことにこだわらずに、なんとか学校に行き、生活を続けてほしいと考えている。

【事例6】かえで教室に定期的に登校することができる5年生児童 F

- ① 父親 母親 姉（中3） 本人
- ② 昨年度の6月ごろから少しずつ足が遠のき始め、1月ごろからは欠席する日のが多くなり、かえで教室を利用し始めた。現在、本人が在籍学級へ行くことは考えておらず、保護者もその考えに同意している。週1日の登校を目標にかえで教室を利用していこうと考えている。
- ③ 【B】を軸に支援を行った。昨年度の3学期は、「週に1日登校できたら」と話していたが、登校できない週もあった。よって、学校に来ることができるようかえで教室にいる児童や教師との人間関係の構築ができるようにした。
- ④ 本年度は、週に1日の登校を続けられている。学校に登校してきた際には、かえで教室で過ごしている。かえで教室では、勉強をすることは少なく、絵を描いたり、タブレットを触っていたりする。時には、かえで教室を利用しているほかの児童と折り紙に取り組むことも増えている。また、学級担任やかえで教室の教師と話す機会が増えている。週に2日登校できる時も増えてきており、登校日数が増えていることから、かえで教室での人間関係が構築できてきているように思う。
- ⑤ もっと登校してほしいという思いはあるものの、担任から夕方登校を提案してもその場では、やろうとはするものの、かえで担当の教師には、夕方登校には否定的な話をしており、保護者の本心が見えてこない。

【事例7】かえで教室での生活があることで登校することができる4年生児童 G

- ① 父親 母親 兄（中2） 本人 妹（年長）
- ② 昨年度の2学期ごろから足が遠のき、3学期からかえで教室を継続して利用している。学校生活のほとんどを、かえで教室で過ごしている。今年もかえで教室を利用し、登校出来ればよいと考えであった。
- ③ 【C】を軸に支援を行った。かえで教室で予定を立てるときも母親と一緒にいて、その予定に対しても保護者が口を出しながら立てる日もあり、そういった日は、本人の機嫌があまりよくない。よって、本人が自己決定をできるよう、促すようにした。
- ④ ほぼ毎日、1～2時間目に母親と一緒に、遅刻で登校してくる。運動会の際は、練習から頑張って参加することができ、本番は1日中参加することができた。かえで教室では利用している児童と楽しく折り紙を折ったり、折り方を教えたりしながら交流することができた。学習に対しては前向きではなく、プリント学習やタブレットドリルなども行うものの、身が入っている様子はない。しかし、単元に興味があったこともあり、自らの意思で理科の学習に参加することを決めた。事前の授業にオンラインで参加したことで実験に参加したいという思いがさらに高まり、在籍学級の中で取り組むことができた。
- ⑤ 保護者は、本人の前では、かえで教室に登校していればよい、そこで自分のやれることをしっかりやってくればよいと言っている。しかし、教師には、「オンライン授業をつないで、友達の様子を見させてほしい」「在籍学級に戻っていけるようになってほしい」と言っており、まだまだ在籍学級への思いが強く感じられる。



▲資料6 児童Gがかえで
でつくった折り紙

【事例8】かえで教室があったことで安定して在籍学級で過ごせるようになった1年生児童 H

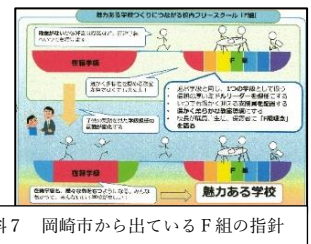
- ① 父親 母親 本人 弟（年中）
- ② 入学当初、「帰る」「ママがいい」などと叫び続け、親御さんの元を離れられなかった。状況を落ち着かせるためにかえで教室を利用して落ち着いてから在籍学級へと行くようにした。

- ③ 【D】を軸に支援を行った。保護者と離れることが嫌で暴れまわってしまっていたため、かえで教室を利用して、気持ちを落ち着かせてから、在籍学級に入れるようにした。
- ④ 学校では1日祖父が付き添いながら過ごすようになっている。しかし、そのような状況でも落ち着くことができなかつたため、かえで教室を利用することにした。かえで教室で落ち着いてから在籍学級に入ることができるようになり、安心感をもって、在籍学級に行けるようになったと感じる。利用開始から2週間ほどすると、かえで教室を利用しなくとも、朝から在籍学級で過ごすことができるようになった。1学期の終わりには祖父が付き添ってはいるものの、廊下にいるだけになっていたり、下校時は祖父の付き添いがなくても友達と下校できたりと、学校生活になじんできている。
- ⑤ 1人で学校生活ができるようにサポートしていきたい。祖父が付き添う時間も減っているので、この状況が続けていきたいと考えている。

4 成果のまとめと今後の課題

一人ひとりの児童を見ていくと、かえで教室をうまく活用できており、新たな居場所として過ごしやすい状況を作ることができていると考えられる。児童によっては、予定を立てた後でも、予定を変えたいと教師に自ら話して柔軟に対応しながら学習に励んだり、人間関係の構築ができていたりする。また、授業内容によっては、在籍学級で取り組んでいることと同じことに取り組める児童もいる。例えば、図画工作科の学習では、授業初めの制作の仕方の説明を聞きに在籍学級の廊下や教室内まで行き、かえで教室で制作に励んでいる様子もあり、児童の思いに寄り添った支援ができています。

しかし、上記でまとめた児童以外にも、かえで教室利用の情宣をしていくところそが本当に必要なことになる。現在、在籍学級で朝の通学団と一緒に登校できずに1日欠席する児童がいたり、保健室に心の休憩に行く児童がいたりする。そのような児童にも安心して過ごしやすいかえで教室にしていくことが必要であると考えます。



▲資料7 岡崎市から出ているF組の指針

そのためには、校内フリースクールの理念の周知こそが1番必要なことであると考えます【資料7 岡崎市教育委員会から示されている校内フリースクール「F組」の理念】。今回、状況を改めて整理する際に、各担任の教師から話を聞いた。その際に、かえで教室があることで、「救われている」「苦しい時にかえで教室に行って表情がよくなって戻ってきてくれる。」などのかえで教室があることで助けられている話が聞こえてきた。一方で「行くことで逃げている。」「嫌なものをさけるために利用している。」などの声があったことも事実である。かえで教室はF組とは違うので、多少の違いはあれど、「F組の理念」に近付けていきながら、それぞれの児童の思いに応えることで、在籍学級で授業が受けられなくても社会的な自立につなげていけるようにしていきたい。

また、教師だけでなく、保護者にも周知していくことが必要になるのではないかと考えた。かえで教室に通えていることをよく思っていない保護者は一定数いた。しかし、学校に通えていることや、かえで教室では自立に向けた取り組みを各々がしていることを周知していくことで保護者の理解につながるのではないかと考える。児童Dのようにかえで教室に行くことをやめるときめてしまうのではなく、常に児童の居場所の一つとして選択できることが校内教育支援センターの在り方だと考える。

かえで教室を最大限活用しながら、一人一人が学校へと登校することができ、社会的な自立を最終目標としたそれぞれにあったゴールに向かえるよう、今後も学校全体として支援していきたい。

また、魅力ある学校を作っていくために、学校全体として「居場所づくり」だけではなく、「分かる授業」や「絆づくり」を推進していきたい。そうすることが長期欠席対策になるとも信じている。